

〈論 文〉

「日本語らしさ」に欠かせない 視点表現の検証

— 中立視座タイプの談話における日本語母語話者と
ベトナム人・中国人日本語学習者の描写の比較から —

中 村 かおり

要 旨

本研究は、中立視座タイプで書かれた文章において日本語らしさに関わる視点表現がどのように表されるかを、日本語母語話者とベトナム人および中国人学習者の描写を比較することで検証したものである。その結果、日本語母語話者は、(1)項の省略によって生じる曖昧さの補完、(2)因果関係など文間の結束性の強化、(3)場面転換後の新たな視座の提示、という3つの目的のために、視点表現を使用していることがわかった。一方、学習者には、連続する文において同じ視座ではなく同じ言語形式を用いる傾向が見られ、そのため不要な視座の移動が生じ、文間の結束性を弱め、日本語らしさを損ねている可能性が示唆された。以上から、学習者に対しては文の曖昧性への意識を高め、文意を明確にするという視点表現の効果と使い方を指導する必要があることを指摘した。

キーワード：事態把握、中立視座、曖昧さの補完、結束性の強化、場面転換の明示

1. はじめに

本稿では、事態把握に関わる視座を表す視点表現のうち、特に中立的な

描写において使用されている表現から、日本語らしさに欠かせない特徴について検証する。まず、これまでの視座および視点表現についての研究を概観し、次に日本語母語話者および学習者に対して行った調査の概要と結果について述べる。その上で、日本語らしい視点表現とは何かを検証し、今後の指導に向けた提案を目指す。

2. 研究の背景

日本語学習者にとって、受身、自他動詞、授受表現など態に関わる表現は習得が難しく、誤用や非用傾向があることが、これまでの多くの研究で指摘されてきた。その要因として、1つの現象を描写する言語形式の違いにとどまらず、目の前で起こっていることをどのように捉えるか、すなわち事態把握の方法が異なることが指摘されている。池上(2008)は事態把握の型の根底的な段階で起こる区別として、話者が問題の事態の当事者として事態を把握する〈主観的把握〉と、話者が事態の観察者として客観的に事態を把握する〈客観的把握〉があるとしている。そして他の先行研究では、英語は客観的把握に基づいて言語形式を選択する言語であり、日本語は主観的把握を好む言語だとされる(森田1981, 池上2008, 伊藤2015ほか)。例1は客観的把握による文、例2は主観的把握による文であり、例2の方がより日本語らしいと言える(中村2015)。

〈例1〉 車が男の人をひいた。

〈例2〉 男の人が車にひかれた。

このように、事態把握とは言語化される前の認知活動であり、この事態把握の方法が異なるために、第二言語学習者が文を産出する際に、母語話者とは異なる言語形式を選択する可能性があると考えられている。

主観的か客観的かといった事態把握の型は「視点」がどこにあるかで判断される。久野(1978)は「視点」をカメラアングル、すなわち話し手が

出来事を表現する立ち位置を示すものと捉えた。佐伯（1987）は視点には2種類あるとし、対象を見る目の位置である「視座」と、視座から見られる対象の側面や属性、主語である「注視点」とがあるとした。その上で、視座には移動の制約があるが、注視点は談話の中で移動するものであると述べている。

視座は「視点表現」の有無により判定することができる。大塚（1995）は、「視点表現」を「叙述に際しての話し手の物理的・心理的な位置を示し、視点を示す表現」と定義づけ、受身表現、授受表現、移動表現を挙げている。例えば、視点表現の有無によって、視座と注視点は次のように考えられる。例3は客観的把握による文で、視点表現がなく中立的である。例4は主観的把握による文で、「～てくれた」という視点表現から、視座と注視点が判定できる。

〈例3〉 太郎が花子に席を譲った。 （視座＝中立）

〈例4〉 太郎が花子に席を譲ってくれた。（視座＝花子・注視点＝太郎）

談話において、日本語母語話者は視座をある登場人物に固定して述べる傾向があり、その距離は共感度（久野1978）によって決まるとされる。それに対し、日本語学習者は視座の中立性や移動性が高く、視点を表す表現の使用が少ないため、不自然な日本語になるとされる（田代1995、大塚1995、奥川2007、レ2018、ダンタイ2017）。これらの視点表現は学習が進むにつれ習得も進むとされ（大塚1995）、視点の一貫性も日本語習熟度が上がるにつれ日本語母語話者に近づくが、規則に対する意識は希薄であるとされている（レ2018）。また、ベトナム語話者は母語ではあまり受身を使わないが、日本語では日本語母語話者より多用する傾向があり、視点表現によって使用傾向は異なるとされている（ダンタイ2017）。以上から、日本語母語話者と学習者の日本語での視点の表し方は表1のように整理できる。

表 1 日本語母語話者と日本語学習者の視点の表し方の違い

	日本語母語話者	日本語学習者
事態把握	主観的	客観的
視座	一人の登場人物に固定	中立性・移動性が高い
注視点	移動	移動
視点表現	使用が多い	使用が少ない (ただしベトナム人は受身表現を多用)

従来の研究調査では、材料として、1 コマに対して 1 文の記述で済むようなコマ漫画が多く用いられ、その描写から視座の中立性や移動性が日本語として不自然だとされてきた。たしかに 1 文ずつ視座が移動するような文章は、日本語では不自然であろう。しかし、日本語母語話者でも共感を示さない中立的な述べ方をする場合はあり、談話が長くなれば視座の中立性・移動性が不自然ではなくなると思われる。また、ダンタイ (2017) ではベトナム人学習者の受身の多用が報告されており、視点表現の使用率の高さがそのまま日本語らしさにつながるわけではない。それでは、日本語らしい視座の表し方と特徴はどのようなものであろうか。そして、学習者の視点表現は日本語母語話者のそれとはどのように異なるのであろうか。

3. 研究の目的と研究課題

以上を踏まえ、本研究では、視座の中立性や移動性が生じやすい複数の場面からなる物語文を用い、日本語母語話者と学習者の描写の特徴、および日本語らしさに欠かせない視点表現について検証し、今後の指導に役立てることを目指す。

研究課題は以下の 2 点である。

研究課題 1：物語文での中立視座や移動視座は日本語らしくないか。

研究課題 2：日本語母語話者および学習者の視点表現の特徴は何か。

4. 研究方法

母語別、日本語習熟度別に視座および視点表現を調査するために、協力者には2つあるいは3つの課題を課した。①母語による自由記述式課題、②日本語による自由記述式課題、③選択式課題である。全協力者に①および③を課し、上級日本語学習者にのみ、③の前に②を追加で行った。①は母語別にどのような記述傾向があるかを見るため、②は日本語での描写が母語とどのように異なるかを見るために行った。また、③は自由記述だけでは、視点表現の使用傾向の比較が難しいため、調査者が用意した文章（資料）を用いて、その談話の中での視点表現の使用傾向を調査するために行った。本研究では、それらの結果から視座タイプを分析し、そこで用いられる視点表現について、日本語母語話者、ベトナム人学習者、中国人学習者に分けて比較する。その上で、日本語らしさにつながる視点表現の特徴について検証する。

4.1 協力者

日本国内の日本語教育機関で日本語を学習しているベトナム人日本語学習者30名（うち2名は不備があったため、選択式課題は除外）および中国人日本語学習者31名を対象とした。他国の学習者からも協力を得たが、母語別に分析するには数が少ないため、本研究では対象から除いた。学習者は日本語能力別にクラス分けがされており、下の4クラスは初級から中級レベル（JLPTN4～N3レベル）、上の4クラスは中級から上級レベル（JLPTN2～N1レベル）で、本研究ではそのクラスによって中級33名、上級26名とした。日本語母語話者は、調査協力依頼への回答のあった21名で、年齢は10代から60代である。

4.2 材料

材料には5分程度のクレイ・アニメーションである「ピングー」シリーズのうち、『ピングーの家出』を用いた。これはペンギン一家の話で展開されるシリーズで、先行研究でも使用されている。ペンギン語のような発話は見られるが、言語的なメッセージがないため、協力者が再話するにあたって言語形式への影響はない。また、本編は登場人物同士の関わり合いが多く、受身や授受などの視点表現の選択が可能な場面が多い。そして、場面の切り替わりがあり、場面ごとに中心となる登場人物が異なるため、視座が一人に固定されにくく、中立的な視座や視座の移動が起こりやすいと判断し、材料として用いることとした。選択式課題に関しては、杉村(2017)を参考に描写および表現を調整し、調査者が作成した(資料)。

4.3 手続き

本調査は、研究協力への同意を得られた学習者に対して、2018年11月に当該機関の各教室で行った。学習者は各教室において、これからペンギンの「ピングー」というタイトルのアニメーションを見ることと、その後、このアニメを見ていない人に対して、この内容をできるだけ詳細に伝えるために、母語による再話の記述式課題を行うこと、さらに上級学習者に対しては、日本語での記述式課題があることを説明した。また、自由記述式課題の後、日本語表現の選択式課題を行うことと、その課題の進め方について例を示しながら説明した。以上の進め方について質問がないかを確認した上で、アニメーションを上映し、記述時間をとった。記述中に作業についての質問がある場合は、調査者が対応した。日本語母語話者については、うち2名は学習者と同時に回答を得たが、残りの19名については、質問紙と同様の内容について、Google Formsを用いてインターネットで回答を得た。

4.4 分析方法

自由記述式課題および選択式課題それぞれについて、協力者ごとの「視座タイプ」を以下のような方法で判定し、その傾向を分析した。

4.4.1 自由記述式課題による視座タイプの分析

自由記述式課題では、母語および日本語での課題について、それぞれ各場面における視座と、視点表現の使用数を集計し、分析を行った。本研究ではダンタイ（2017）、レ（2018）を参考に、以下の視点表現を分析対象とした（表2）。

表2 本調査で扱う視点表現の言語形式

視点表現	言語形式
受身	〈日本語〉 V れる／V られる 〈ベトナム語〉 bị(被)／được(得)+動作主+V 〈中国語〉 被+動作主+V
授受	〈日本語〉 (V て) あげる・(V て) くれる／(V て) もらう 〈ベトナム語〉 動作主+cho+受け手／受け手+được+動作主+cho 〈中国語〉 動作主+给+受け手+動詞 / (为+受け手)
使役受身	〈日本語〉 V せられる 〈ベトナム語〉 bị(被)+bắt+V 〈中国語〉 (使役と同形〈让+動作主+V〉)
使役授受	〈日本語〉 V させて+あげる・くれる／もらう 〈ベトナム語〉 動作主+đê+cho／受け手+được(得)+cho 〈中国語〉 (使役と同形〈让+動作主+V〉)
移動	〈日本語〉 V ていく／V てくる 〈ベトナム語〉 V +方向を表す助詞 〈中国語〉 (-去)／V(来)
主観	〈日本語〉 (1) ほしい／～たい (2) 思う／わかる／感じる／決める 〈ベトナム語〉 (1) muốn (2) nghĩ／hiểu／cảm thấy／quyết định 〈中国語〉 (1) 想要・想 (2) 想／知道／感觉・觉／決定

母語による記述式課題は、各文の対訳を依頼した⁽¹⁾。対訳は意識ではなく、表2の表現を参考に忠実に訳すよう指示した。調査資料として用いる前に、調査者が対訳と表現を確認し、不明な点は訳者に確認を行った。各文に視座を表す表現がある場合はその視点人物の視座と見なし、視座を表す表現がない場合は中立とした。

主観表現のうち感情表現や語彙は分析対象としないが、「こわがっていた／嬉しそうに／嫌いらしく」のように、視座が動作主でないことを示す表現は分析対象とした。その他の主観表現に関しては主語に注目し、「ピングー／パパ／ママ」という呼び方ではなく、一人称を表す言葉である「Tôï／我」などがある場合は分析対象とした。また、特定の人物の発話は、その人物の視座として数えた。

場面は登場人物の人数に応じて、次の4場面を設定した。①家での食事場面（登場人物3人）、②ピングーが家出してさまよう場面（1人）、③両親がピングーを心配し、探しに出る場面（2人）、④ピングーを見つけて自宅に戻って寝る場面（3人）である。その上で、各自由記述の文を場面ごとに数え、文の総数のうち、半数以上の文で特定の視座を表す表現が使われている場合は、その人物の視座とした（表3、4参照）。視座のタイプは、次の5つに分類した。

類型Ⅰ 中立型...どの場面においても中立的な視座が中心

類型Ⅱ 主人公固定型...主人公に視座を固定し、主人公がいない場面は
中立的

類型Ⅲ 各場面固定型...各場面で一人の登場人物に視座を固定

類型Ⅳ 中立・固定混在型...中立視座と各場面固定視座とが混在

類型Ⅴ 一場面内移動型...一場面において複数の人物に視座が移動

(1) 対訳はベトナム語訳をグエン・チィ・アン・トゥさん（拓殖大学国際課職員）、中国語訳をザンカリンさんと梁穎穎さん（拓殖大学言語教育研究科博士前期課程在籍）に依頼した。中国語は対訳後、翻訳者2名により相互にチェックを行った。

表3 視座判定の例（中国人学習者）【視座 = ピンゲー（3文/5文）】

視座判定	文
中立	企鵝在吃晚餐時和爸媽鬧脾氣了 (ピンゲーは晩ご飯を食べる時に、両親に癩癩を起こしました。)
中立	且因為它的頑皮，導致整桌菜都翻倒了 (ピンゲーのいたずらで、ご飯は全部落ちました。)
ピンゲー	結果它被媽媽打屁股 (その結果、ピンゲーはママにお尻を叩かれました。)
ピンゲー	被打的企鵝覺得它的家人沒一個愛它的 (叩かれたピンゲーは両親が自分を愛していないと思いました。)
ピンゲー	它決定離家出走 (ピンゲーは家を出ることを決めました。)

表4 視座判定の例（日本語母語話者）【視座 = 中立（5文/6文）】

視座判定	文
中立	ピンゲーの家族のお話です。
中立	ある日の食事のとき、ピンゲーが行儀よく食べないため、両親は注意し、お手本を見せつつしつけようとしていました。
中立	ところが、ピンゲーは自分の態度を直そうとしませんでした。
中立	それどころか、さらに増長してとうとうテーブルクロスを引っ張って、食べ物や食器をすべて床に落としてしまいました。
中立	怒った両親は、体罰を与えて、叱りつけます。
ピンゲー	ピンゲーは許してと言いますが、 <u>きいてもらえない</u> ので、外に飛び出してしまいました。

上級学習者の日本語での記述には、「ピンゲーはママをたたかれて*」のように、助詞まで含めて考えれば日本語として不適切な言語形式もあったが、動詞の形式を優先し、この場合は受身として数えた。

4.4.2 選択式課題の分析

選択式課題の設問は全部で30問あり、まず、項目ごとに使用率を出した。質問紙上で助詞と表現を選んで双方に○をつける形式であるため、設

間によっては「*いすを揺れて」のような非文もある。また、記入漏れにより、使用率の合計が100%にならない項目もあるが、そのままの数値を示した。

次に、単一の表現選択だけでなく、2文にわたる場合の一貫性に対する意識を見るために、2文ずつの組み合わせについて集計を行い、割合を出した。ただし、本稿では紙幅の都合上全ての組み合わせではなく、主なもののだけを示しているため、合計が100%にならない項目もある。

最後に、自由記述と同じく、選択肢の組み合わせから、全体的な視座タイプがどのようになっているかを見た。

5. 結果

5.1 自由記述式課題における視座タイプ

まず、自由記述式課題で視座がどのように示されたかをタイプに分けて見ていく。日本語母語話者 (JJ), ベトナム人学習者のベトナム語記述 (VV), 同学習者の日本語記述 (VJ), 中国人学習者の中国語記述 (CC), 同学習者の日本語記述 (CJ) の割合を以下に示す (表5)。表には、書き手の視点が付け加えられている割合【書き手視点】も示した (*)。なお、

表5 自由記述式課題における視座タイプ (%)

	JJ(人数) N=21	VV(人数) N=30	VJ(人数) N=10	CC(人数) N=31	CJ(人数) N=17
類型Ⅰ 中立型	57.1 (12)	66.7 (20)	50.0 (5)	61.3 (19)	58.8 (10)
類型Ⅱ 主人公固定型	14.3 (3)	3.3 (1)	20.0 (2)	3.2 (1)	11.8 (2)
類型Ⅲ 各場面固定型	28.6 (6)	16.7 (5)	20.0 (2)	6.5 (2)	5.9 (1)
類型Ⅳ 中立・固定混在型	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	12.9 (4)	5.9 (1)
類型Ⅴ 一場面内移動型	0.0 (0)	6.7 (2)	10.0 (1)	16.1 (5)	17.6 (3)
*【書き手視点】	5.0 (1)	50.0 (15)	30.0 (3)	25.8 (8)	29.4 (5)

書き手視点のみで書いた学習者2名（VV）は類型Ⅰ～Ⅴの数には入れていない。

いずれの話者においても最も多かったのは、類型Ⅰの中立型で、半数を超えている。日本語母語話者では、中立型に次いで、類型Ⅲの各場面固定型が多く、主人公だけではなく、各場面の中心的な登場人物に視座を固定し、物語を通して共感する人物が緩やかに移っていく傾向が見られた。ピンゲーがいる場面ではピンゲー中心で、いない場面では中立的に描写する類型Ⅱの主人公固定型も14.3%いたが、類型ⅠやⅢほど多くなかった。中立視座と固定視座が混在する類型Ⅳや、一場面において複数人物間を視座が移動する類型Ⅴはなかった。

ベトナム人学習者も同様に、中立型の次に各場面固定型が多かった。また、母語で書いた場合と日本語での描写を比べると、日本語の方では中立描写が減り、主人公のピンゲー固定型と各場面固定型の割合が増え、日本語母語話者の分布に近づいている。特筆すべきは、母語での描写では50.0%の学習者が【書き手視点】を付け加えていたことである。物語の前後に書き手の視点から読み手に対して、物語の意義や教訓について述べる文として、「このアニメで子供への親の愛は無限であることを実感させられました。/ 両親と過ごす楽しい思い出をたくさん作って大切にしてください。世界の中で唯一の両親ですから。」などが追加されており、ベトナム語での物語描写には、日本語での描写と異なる構造があることがうかがえた。

中国人学習者でも中立型が最も多いが、そのほかに、中立・固定混在型や一場面内移動型が27.1%に見られた。このような、場面ごとではなくより狭い範囲での視座移動は、ベトナム人学習者にはあまり見られず、中国人学習者特有の傾向であった。

5.2 日本語での自由記述式課題における視点表現

次に、日本語での自由記述において、視座がどのように示されたかを見る。日本語母語話者（JJ）、ベトナム人学習者の日本語記述（VJ）、中国人学習者の日本語記述（CJ）の使用数と全体に占める割合を以下に示す。1人当たりの表現数は、日本語母語話者が最も多く、先行研究を支持する結果となった（表6）。

日本語母語話者の記述では、類型Ⅰの中立型と判定された協力者（以下、中立型協力者のように「○○型協力者」と略述）の文章でも視点表現が使われ、特に移動表現の使用が目立った。最も多かったのが「帰ってこない」で移動表現の半数を占めたが、他にも「出て行った」「そのうち戻ってくるだろう」「歩いて行く」のような表現が見られた。中国人学習者にも「帰ってこない」という表現が見られたが、ベトナム人学習者では「ピングーは家を出た／家出した」という表現が多く用いられ、移動表現は使われていなかった。

次に日本語母語話者の特徴として、受身を「叱られた子ども」と従属節で使用するケースが多かった。これはどの視座タイプの協力者の文章でも観察された。中立型協力者では、「父に無視され、息子は」という形での受身の使用があった。また、主人公固定型・各場面固定型協力者では、「父に注意された。叱られた子どもは…」のように、受身を重ねて使用す

表6 日本語自由記述式課題で使用された視点表現

	JJ N=21	VJ N=10	CJ N=17
視点表現総数（1人当たり使用表現数）	108（5.1）	36（3.6）	53（3.1）
受身（全体に占める割合％）	32（29.6％）	11（30.6％）	10（18.9％）
授受（全体に占める割合％）	17（15.7％）	10（27.8％）	4（7.5％）
移動（全体に占める割合％）	33（30.6％）	0（0.0％）	9（17.0％）
主観（全体に占める割合％）	6（5.6％）	5（13.9％）	13（24.5％）

るケースも複数あり、「注意された／叱られた／怒られた」だけで受身表現の56%（18例）を占めた。一方、学習者には従属節や連続する文での使用は見られなかったが、「叱られた／叩かれた」という表現は複数使われていた。そのほかの表現として、日本語母語話者は「雪に覆われた街」「愛情に包まれて」という慣用的な表現の使用が見られた。一方、学習者は「部屋が暖められ」「食べ物が落とされて」という、物に注視点を置いた表現の使用があった。

主観表現については、日本語母語話者とベトナム人学習者は使用率が高くなく、「食べたくない」「家出することにした」が中心であったが、中国人学習者は「わかる／感じる／～たい／～たくない」など全体的に使用率が高かった。これは母語での記述でも同様で、ある人物の台詞として発話文を多く差し込み、そこに主観表現を用いることによって視座を表す傾向が見られた。

授受表現の使用は、視座タイプによってばらつきがあり、主人公固定型と各場面固定型協力者での使用が多かった。より詳細な傾向を見ると、日本語母語話者は、物語最初の第1場面で父から母に、母からピングーに「食べさせてあげる」を用いているが、第4場面ではピングーの視座から描写し、「飲ませてくれる」「飲ませてもらう」「暖めてくれる」を使用していた（表7）。物語の最初は俯瞰的に述べ、話が進むにつれ、主人公への共感が増していく傾向が見られた。ベトナム人学習者も授受表現の使用

表7 日本語自由記述式課題で使用された授受表現

	JJ N=21	VJ N=10	CJ N=17
表現数	17	10	4
あげる／～てあげる（割合％）	4 (23.5%)	5 (50.0%)	3 (75.0%)
くれる／～てくれる（割合％）	9 (52.9%)	5 (50.0%)	0 (0.0%)
もらう／～てもらう（割合％）	4 (23.5%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)

率は高く、各場面別の視座の表し方は日本語母語話者と同様だったが、「～てもらう」の使用はなかった。中国人学習者は、授受表現は第1場面で「食べさせてあげる」「もらった食べ物」と記述したのみで、物語後半には使われていなかった。

5.3 選択式課題における視座タイプ

選択式課題の視座タイプも、日本語の自由記述と同じ傾向であった。自由記述で中立型と判定された協力者は、選択においても中立型と判定でき、それぞれの視座タイプが大きく異なる協力者はほぼいなかったため、選択式の視座タイプも記述式と同様であるものとする。そこで以下は、文単位での分析を進めることとする。

5.3.1 単文からみる視点表現の使用傾向

選択式課題において、日本語母語話者（JJ）の使用率が比較的高い項目について、ベトナム人上級学習者（VU）、ベトナム人中級学習者（VI）、中国人上級学習者（CU）、中国人中級学習者（CI）の使用率と比較した（表8）。表現選択の結果はそれぞれの項目の中での割合を表している。

〈受身〉では、設問⑦は、「ピングーは怒った／怒られた」のどちらでも文意は通るが、90.5%の日本語母語話者が「ピングーは怒られた」を選択しており、これは中立型協力者であっても使用率が高かったことを示している。一方の学習者は、母語および日本語習熟度によらず受身の使用率が低く、能動文で述べていることがわかった。同じ〈受身〉でも、⑥では日本語母語話者の使用率が下がり、71.4%となっている。しかし、学習者の方では受身の使用率が上がり、状況に合わない「*パパが注意された」を含めると、6割程度の学習者が受身形を選択しており、日本語母語話者の使用率に近づいている。

移動表現〈～てくる〉に関しては、家出したピングーを両親が待ってい

表8 日本語母語話者の使用率の高い視点表現（％）

〈受身〉					
	JJ N=21	VU N=9	VI N=19	CU N=17	CI N=14
⑦ ピンゲーは怒られた	90.5	0.0	5.3	17.6	14.3
ピンゲーは怒った	9.5	100.0	94.7	82.4	85.7
⑥ パパに注意されました	71.4	55.6	36.8	47.1	28.6
パパが注意しました	28.6	33.3	26.3	17.6	14.3
*パパが注意されました	0.0	11.1	21.1	29.4	35.7
*パパに注意しました	0.0	0.0	15.8	11.5	15.2
〈～てくる〉					
	JJ N=21	VU N=9	VI N=19	CU N=17	CI N=14
⑳ 帰ってきません	95.2	11.1	21.1	58.8	7.1
帰っていません	4.8	44.4	21.1	11.8	50.0
帰りません	0.0	44.4	57.9	29.4	42.9
〈授受〉 ※ ㉓は JJ の使用率は低いが、㉔との比較のために提示					
	JJ N=21	VU N=9	VI N=19	CU N=17	CI N=14
⑮ 来てくれませんか	100.0	44.4	10.5	52.9	21.4
来ません	0.0	44.4	52.6	11.8	35.7
来ていません	0.0	11.1	36.8	29.4	42.9
⑬ 抱っこしてくれませんでした	90.5	0.0	21.1	11.8	57.1
抱っこしませんでした	4.8	100.0	31.6	64.7	35.7
抱っこされませんでした	4.8	0.0	47.4	23.5	7.1
㉓ ママが来て	90.5	77.7	68.4	52.9	42.8
ママが来てくれて	9.5	22.2	31.6	47.1	57.2
㉔ 抱き上げてくれました	90.5	66.7	74.7	23.5	35.7
抱き上げました	9.5	33.3	26.3	76.5	64.3
③ 食べさせてあげました	81.0	44.4	31.6	35.3	42.9
食べさせました	19.0	55.6	21.1	52.9	28.6
食べられました	0.0	0.0	47.4	11.8	28.6

る第3場面の設問⑳で、日本語母語話者ではほぼ全員が「帰ってきません」を選択している。一方、学習者では、中国人学習者が上級になると使用率が上がっている。しかし、ベトナム人学習者では上級学習者で「帰っていません」の選択が増えており、日本人と比較すると使用率は高くない。ベトナム人は自由記述でも移動表現の使用が0%だったことから、移動表現を使って視座を示すことへの意識は低いと見られる。

〈授受〉に関しては、設問㉑では、日本語母語話者は全員「ピングーは家を出ましたが」に続く文として「パパもママも来てくれませんか」を選択したが、学習者は習熟度が高い方が使用率も高い結果となった。設問㉒の「ピングーは悲しくなって、パパに『抱っこして』と言いましたが、抱っこしてくれませんでした」では、一文に含まれる「悲しくなる・言う・抱っこする」という3つの動詞について、ほとんどの日本語母語話者は授受表現を用いて視座をピングーに統一している。それに対し、学習者は中立表現か受身表現を選択する傾向が見られた。授受と受身の使用傾向の違いは中級学習者に特徴的で、設問㉓でも見られた。日本語母語話者は、「パパはママにおいしいよと言って」に続けて、授受表現を用いて「食べさせてあげました」とするか、中立の「食べさせました」としているが、中級学習者は「食べられました」を用いる傾向があった。

また、同一主語の連続動作である㉔㉕で、ママがピングーに対して「㉔来て・㉕抱き上げました」という2つの動作を行った描写では、日本語母語話者は「来て」には授受表現を用いず、後の「抱き上げてくれました」にのみ使用している。一方、学習者ではその割合は様々であった。そこで、次項で連続文の分析を行い、その詳細を見る。

5.3.2 連続文からみる視点表現の使用傾向

述語2つ以上からなる重文・複文あるいは連続する複数の文（以下、連続文と略述）で、どのように視座および注視点が選択されているかを、日

本語母語話者で最も多く見られた表現を基準に分析した（表9）。

先行研究では、日本語母語話者は連続文の場合、視座を固定するとされてきた。その傾向が確認できる回答もあったが、実際には、2つの述語の

表9 連続文での視点表現（%）

〈受身〉【視座：中立（中）・ピングー（主人公）（ピ）・パパ（父）・ママ（母）】

	(視座)	日本人 N=21	ベトナム人 N=28	中国人 N=31	
⑤	食べ物を飛ばしたので、パパが注意しました	(中・中)	23.8	25.0	0.0
	食べ物を飛ばしたので、パパに注意されました	(中・ピ)	66.7	10.7	16.1
	食べ物が飛ばされたので、パパが注意しました	(父・中)	4.8	3.6	22.6
	食べ物が飛ばされたので、パパに注意されました	(父・ピ)	0.0	42.9	29.0
	食べ物が飛んだので、パパが注意しました	(中・中)	0.0	7.1	6.5
	食べ物が飛んだので、パパに注意されました	(中・ピ)	4.8	14.3	25.8
⑥	パパが注意しました。ピングーは怒ったので、	(中・中)	4.8	35.7	32.3
	パパが注意しました。ピングーは怒られたので、	(中・ピ)	19.0	0.0	0.0
	パパに注意されました。ピングーは怒ったので、	(ピ・中)	0.0	42.9	54.8
	パパに注意されました。ピングーは怒られたので、	(ピ・ピ)	71.4	3.6	12.9
⑪	パパが怒って、ママがおしりをたたきました	(中・中)	19.0	50.0	32.3
	パパが怒って、ママにおしりをたたかれました	(中・ピ)	33.3	21.4	29.0
	パパに怒られて、ママがおしりをたたきました	(ピ・中)	4.8	10.7	9.7
	パパに怒られて、ママにおしりをたたかれました	(ピ・ピ)	42.9	10.7	29.0

〈授受〉

	(視座)	日本人 N=21	ベトナム人 N=28	中国人 N=31	
⑬	ピングーは言いましたが、パパは抱っこしませんでした	(中・中)	4.8	53.6	51.6
	ピングーは言いましたが、パパに抱っこされませんでした	(中・ピ)	9.5	32.1	16.1
	ピングーは言いましたが、パパは抱っこしてくれませんでした	(中・ピ)	85.7	14.3	32.3
⑳	ママが来て、抱き上げました	(中・中)	9.5	32.1	29.0
	ママが来て、抱き上げてくれました	(中・ピ)	81.0	32.1	9.7
	ママが来てくれて、抱き上げました	(ピ・中)	0.0	0.0	41.9
	ママが来てくれて、抱き上げてくれました	(ピ・ピ)	9.5	32.1	19.4

視座が一人に固定されているとは言えない例も少なくなかった。設問⑤「ピングーが食べ物を飛ばしたので、パパが注意しました (23.8%)」[視座：中立・中立]，⑥「パパが注意しました。ピングーは怒られたので (19.0%)」[視座：中立・ピングー]，⑩「パパが怒って、ママにおしりをたたかれました (33.3%)」[視座：中立・ピングー] など、注視点が移動しているにも関わらず、中立視座との混在も多くあり、これは学習者との差も大きくなかった。設問⑩については、中立視座、視座の移動などが見られる協力者が多く、合わせて57.1%の母語話者が視座を一人の人物に固定していなかった。

学習者の回答に注目すると、⑤「食べ物が飛ばされたので、パパに注意されました」と、受身に形式を統一する学習者も少なくなかった（ベトナム人42.9%、中国人29.0%）。全体的に学習者には中立的な描写が多いが、一方で「ママにたたかれました」で文を結ぶ学習者は、ベトナム人で32.1%、中国人では58.0%おり、受身を用いた視点表現の使用率は低くなかった。

〈授受〉について、⑬では、「言いましたが」に続けて日本語母語話者の85.7%がピングーの視座で「抱っこしてくれませんでした」を選択しているが、学習者は視座を替える、あるいは授受ではなく受身表現を使う割合が高くなった。しかし、⑳での「くれる」の使用率は日本語母語話者の90.5%に対し、学習者もベトナム人64.2%、中国人71.0%と、低いとは言えない。しかし、どこに「くれる」を用いるかが分かれた。日本語母語話者の81.0%は後ろの述語のみに授受表現を用い、「来て、抱き上げてくれました」を選んでいる。一方、学習者は前での使用、前後両方での使用など、様々な選択をしている。ベトナム人学習者は両方に視点表現を用いる割合が32.1%と、日本語母語話者の9.5%に比べて高かった。また、中国人学習者に特徴的な傾向として、「来てくれて、抱き上げました」と前の述語のみで視座を示した人が41.9%おり、他の0%と比べて大きく異なった。

6. 考察

6.1 物語文での中立視座や移動視座は日本語らしくないか

研究課題1では、場面が複数ある物語において、日本語母語話者と学習者に中立視座および視座移動がどの程度見られるかについて検証した。その結果、日本語母語話者は、学習者同様、半数以上が中立型で、次いで場面によって登場人物に視座が移る各場面固定型という判定になった。先行研究では、日本語母語話者は一貫した視座で描写する主人公固定型が多く、中立性や移動性は不自然であるとされてきた。本調査でも、一場面内移動型は見られなかったが、中立型や各場面固定型は多く見られた。したがって、日本語らしさを損なう要因は、連続文での視座移動のある一場面内移動型であると考えられる。しかし、視座移動に対して許容度の高い連続文と、日本語母語話者の大半が視点表現を用いる連続文があったこと、また、中立型協力者であっても使用率の高い視点表現が見られたことから、日本語らしい視点表現には視座以外の要素による制約があることが示唆された。

6.2 日本語母語話者および学習者の視点表現の特徴

6.2.1 日本語母語話者の視点表現の特徴

研究課題2では、中立型の日本語母語話者が用いた視点表現が日本語らしさに欠かせないものであるとし、その特徴について検証して学習者の結果と比較した。日本語母語話者に関しては、談話全体が中立型であっても、9割以上が選択する視点表現があり、それには次のような特徴が見られた。

まず、連続文の前後の注視点が異なり、特に物理的な移動を示す場合に視点表現を用いる傾向が見られた。この使用には、移動方向あるいは動作

対象など文に必要な項が不足している場合に、意味の曖昧さを補完する効果があると考えられる。例えば、「⑮ピングーは家を出ましたが、パパもママも来てくれませんか。(使用率 100%)」では、注視点がピングーからパパとママに移動するため、「来ません」だけでは「どこに」という到達点が不明であり、視座がなければ不完全な描写になる。また、「⑳ママが来て」「㉑抱き上げてくれました。(90.5%)」も文中に「だれを」が明示されていないため、視点表現がなければ対象が不明である。このような曖昧さを補完し、省略された対象などを明確にするために、視点表現の使用率が高くなったと考えられる。一方で、同一主語の2つの連続する述語に対し、視点表現を重ねて使用した母語話者は9.5%に過ぎなかった。注視点が移動しない場合は、中立視座との併用でも視座固定が明らかなため、視点表現の重複を避け、1つに絞ったと考えられる。

次に、因果関係など文間の結束性を持たせる効果が見られた。「㉒ピングーは怒られたので」は前文の視座「㉓パパが注意しました/パパに注意されました」にかかわらず、90.5%が選択している。後に続くピングーが「いすを揺らして」いた原因が「パパが注意し」たことであるため、「怒られた」を用いて視座を示すことで因果関係を明らかにし、それぞれの動作に結束性を持たせていると考えられる。「ピングーは怒ったので…」という表現を用いた場合、ピングーが怒りを感じたという意味と、だれかを注意したという意味の二通りに取れる。仮にピングーがだれかを注意したという意味だとすると、「パパが注意しました」との因果関係がわからず、文間の結束性が感じられない。そこで、前文のパパが注意したこととの結束性を持たせるため、「怒られた」を選択したと推察される。このように、母語話者は文間の関係を考え、相互の結束性を強化するために、視点表現を選択していると考えられる。

そして、新たな視座を示すことで、場面転換をスムーズにする効果が見られた。ピングーの家出場面から両親が子どもの帰りを待つ自宅場面に切

り替わった際、「ママが時計を見ました。ピングーはまだ帰ってきません。(95.2%)」とすることで、家出したピングーから両親に視座が移ったことを明確に伝える効果を出している。仮に「帰りません」とすれば、視座移動が確定されないだけでなく、ピングーの意思表示のようにも取れる。このような場面転換後の視座の提示は、自由記述式課題においても同様に、視点表現を用いて新たな視座を示すことにより、場面転換とともに視座が別の人物に移ったことを伝える効果が観察された。

以上から、中立型の日本語母語話者が使用した視点表現には、(1) 連続する文において項の省略によって生じた曖昧さを補完する場合、(2) 因果関係などを明らかにし、文間に結束性を持たせる場合、(3) 場面転換後の新たな視座を表す場合に使用されていると考えられる。つまり、視点表現は共感を表す目的以外にも、読み手に対する必要最低限の談話の方向付けとして使用されていると言える。大塚（1995）は視点表現の使用が増えるにつれ、注視点の省略も増すと述べているが、主語である注視点を繰り返し明示するのを避けるために、視点表現を用いているとも考えられる。伊藤（2015）は、言語によって事態の描き方の相違があることを認めつつ、それが把握の仕方によるものに限らず、当該言語の持つ統語論的・意味論的特徴から生じている可能性を指摘している。上記の不足情報を補うための視点表現の使用も、主語の省略が可能な日本語の特徴から生まれている可能性があると言える。

6.2.2 学習者の視点表現の特徴

学習者の視座タイプを見ると、母語での描写では、書き手視点から物語全体について中立的に概観した後、書き手の解釈を意義や教訓として記述する協力者が少なくなく、ベトナム人では半数がそのような書き方をしている。つまり、母語での描写の型が事態把握の表現の選択意識に関わっている可能性が考えられる。しかし、日本語での描写では、母語に比べて視

座を固定するタイプが増えており、日本語での描写スタイルが母語のそれと異なることは意識されていると思われる。

次に、学習者の視点表現の特徴を考察する。まずベトナム人学習者は連続文において受身や授受表現などの形式を統一する傾向が見られた。「食べ物が飛ばされたので、パパに注意されました (42.9%)」「ママが来てくれて、抱き上げてくれました (32.9%)」など、前後の視座ではなく、形式を統一することで文間に結束性を持たせようとしていると考えられる。しかし、それにより「食べ物が飛ばされた」の視座がピングー以外の人物となり、「パパに注意されました」のピングーの視座と異なるため、意図しない視座移動を生じさせる結果となっている。これは学習者特有の傾向だと言え、これが日本語らしさを損なう結果につながっていると考えられる。

また、ベトナム人学習者には受身の多用が見られたが、これは自動詞文との混同に起因している可能性がある。リュウ (2017) によると、ベトナム語では日本語の自動詞文は受身文として示されるため、「写真が見つかった/写真が見つけられた」の区別はなく、同じ言語形式であるという。そこから考えると、「食べ物が落とされて、皿も割られて (22.6%)」という表現は、注視点は日本語母語話者と同じように食べ物や皿に置かれているものの、その表現方法として自動詞ではなく受身を選択した可能性がある。自由記述式課題でも「子どもが見つけられた・部屋が暖められた」という表現があったが、受身の効果を意識して使っているかは明らかではない。日本語母語話者が授受表現を使用している箇所でも受身を使用していることもあり、受身と授受、そして受身と自動詞との使い分けについて、さらに調査を行った上で、適切な指導が必要であろう。

中国人学習者は「帰ってこない・叱られる」などよく耳にする言い回しを含む移動・受身表現に関しては、日本語習熟度が上がるにつれて使用率が上がっている。一方、授受表現については中級学習者より上級学習者の

方が使用率が低く、自由記述でも少ない。これは、表2で見たように移動・受身については中国語で表すことができるが、授受補助動詞は母語で表せないことが影響している可能性がある。中国語の訳者らによれば、中国では、授受表現については本動詞の方向性についての教授が中心で、補助動詞は「ます形・辞書形」で代替してもあまり意味が変わらないため、「教えてください」を「(私に) 教えます・教える」のように、ます形や辞書形でもよいとする教科書もあると言う。そのような背景が母国での学習を終えてきた上級学習者の使用率が低かった要因になっている可能性も否定できない。

また、中国人学習者では、連続文における授受表現の使用箇所について特徴的な傾向が見られた。「㉓ママが来てくれて、抱き上げました (41.9%)」と、前のみに使う人が最も多く、中立型 (29.0%) や後のみ (9.7%)、前後両方 (19.4%) と比較しても高い使用率である。前後両方 (16.1%) よりも「パパが来てくれて、毛布をかけました (22.6%)」のほうが多いことから、この傾向がうかがえる。その原因として2つの可能性が考えられる。1つは述語が2つある場合、前の述語の方が重要だと考えている可能性、もう1つは「来てくれる」が授受表現というよりも、1つのまとまった表現として定着している可能性である。今回の調査ではその原因を特定することはできなかつたため、今後の課題としたい。

最後に、学習者全体の8割以上が選択した設問⑦「ピングーは怒ったので」では、「怒る」の語義の捉え方の違いが影響した可能性がある。自由記述では「叱られた」が複数あり、直前の設問⑥では「注意された」を半数以上が選択していることを考えると、受身を視点表現として使う意識はあると推察される。しかし、ここでの選択率の低さから、「怒る」を個人的な感情を表す自動詞として捉え、「AがBを怒る」という他動詞としては考えていなかった可能性がある。「叱る」であれば、受身の使用率が上がったかもしれず、調査者の配慮不足であった。

7. まとめと今後の課題

調査の結果から、先行研究同様、連続文における視座移動が日本語らしさを損なうことが示唆された。一方で、日本語母語話者にも中立型や視座移動のある各場面固定型は少なくなく、それらは日本語らしさに直接関わらないと言える。そして、中立型でも用いられる視点表現は、(1) 文に必要な項が省略されている場合において、曖昧さを補完するため、(2) 因果関係の明示により文間の結束性を持たせるため、(3) 新たな視座の人物を中心とした場面に切り替わったことを示すために使われていることがわかった。一方、注視点が移動せず、主語が同一である場合は、むしろ連続文の場合は重複を避けて、後の述語のみに視点表現を用いる傾向があった。以上のような、共感を示す主観的把握とは異なる視点表現の使い方が、日本語らしさに関わることが示唆された。

学習者の描写に見る「日本語らしくない」視点表現の使い方として、(1) マイナスのイメージを伴わない受身の使用、(2) 連続文において言語形式を統一したために生じる視座移動、(3) 連続文における視点表現を前のみを使用することが挙げられる。これらは、受身や授受など視点表現によって伝わるニュアンスや、視点表現により規定される視座に対する意識がないために起こると考えられる。自由記述においても、母語話者同様に注視点の省略が見られたが、省略によって曖昧さが生じていることや、視点表現がないために生じる日本語としての不完全さについては意識されていないと考えられる。

以上から、今後の指導への提案を試みる。視点表現は共感を表すだけでなく、文意の明確化や文間の結束性に欠かせないことを伝える必要がある。項が省略された曖昧な文において、受身や授受といった視点表現を使うことで情報を補完でき、明確に文意が示せることと、視点表現を使わな

いのであれば、冗長になったとしてもすべての項を中立的に明示しなければならないという指導が必要であろう。特に、ベトナム人学習者にとっての受身の多用と自動詞との区別、中国人学習者にとっての授受表現の有無による文意の違いなどは、母語の影響を受けやすく、産出の難しい項目であると言える。そのため、視点表現があることで視座や注視点が明確になることと、視点表現がないことでそれとは異なる視座や注視点が伝わってしまうことについて、学習者に意識させるような指導を行うべきである。その際、従属節を含む連続文で視点の一貫性を保つための指導も必要であろう。そのために求められる、学習者の使用実態に関する詳細な調査および具体的な指導法については、今後の課題としたい。

[付記]

本研究は平成30年度言語文化研究所研究助成「日本語らしさを伝える文型の指導法」による研究成果の一部である。

引用・参考文献

- 池上嘉彦 (2008) 「主観的把握 - 認知言語学から見た日本語話者の一側面」『言語教育・コミュニケーション研究』(3), pp.1-6, 昭和女子大学大学院
- 伊藤創 (2015) 「言語間における事態の描き方の相違についての一考察」『関西国際大学研究紀要』(16), pp.1-12, 関西国際大学
- 伊藤創 (2016) 「日本語・中国語・英語母語話者における事態参与者焦点化の決定要因の差異」『関西国際大学研究紀要』(17), pp.11-22, 関西国際大学
- 大塚純子 (1995) 「中上級日本語学習者の視点表現の発達について——立場志向文を中心に——」『言語文化と日本語教育』(9), pp.281-292, お茶の水女子大学日本語文化学研究会
- 奥川育子 (2007) 「語りの談話における視点と事態把握」『筑波応用言語研究』(14), pp.31-43, 筑波大学
- 佐伯胖 (1978) 『イメージ化による知識と学習』, 東洋館出版社
- 徐愛紅 (2011) 「〈事態把握から見た日中両言語の語り——語順を中心に——〉」『日本語日本文学』(21), pp.57-68, 創価大学
- 杉村泰 (2017) 「マレー語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・

- 他動詞・受身の選択について——動作主の不注意による対象の変化を表す場合——』『ことばの科学』(31), pp. 5-20, 名古屋大学
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点——不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる」『日本語教育』(85), pp. 25-31
- ダントイ・クインチャー (2017) 「ベトナム人日本語学習者の物語の描写における視点表現の特徴：日本語母語話者との比較を通じて」『一橋大学国際教育センター紀要』(8), pp. 93-105, 一橋大学
- 中村かおり (2015) 「受身のコアを伝える視聴覚教材の活用」『拓殖大学日本語紀要』(25), pp. 27-38, 拓殖大学
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- 森田良行 (1989) 『日本人の発想, 日本語の表現——「私」の立場がことばを決める』中央公論社
- 矢吹ソウ紀子 (2017) 「日本語学習者の談話における視点表現——日本語母語話者との比較から——」『Journal CAJLE』(18), カナダ日本語教育振興会
- リュウ・ガン・ツ・ウェン (2017) 「日本語とベトナム語の受身文の対照研究」『第15回日本語教育研究集会予稿集』名古屋大学, PDF版 https://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/menu7_folder/symposium/pdf/15/04.pdf
- レ・カムニョン (2018) 『ベトナム人日本語学習者の産出文章に見られる視点の表し方及びその指導法——学習者の〈気づき〉を重視する指導法を中心に——』ココ出版

(原稿受付 2019年6月17日)

【資料】 アンケート調査項目

1. 5分間のビデオを見ます。ペンギンのペンゲーとパパとママの話です。その後、その話の内容を、このビデオを見ていない人のために、自分の国のことばで、できるだけ詳しく説明してください。
2. ビデオの話の内容を、このビデオを見ていない人のために、日本語で、できるだけ詳しく説明してください。翻訳ではありませんから、1. 自分の国のことばの説明と同じでなくてもいいです。
3. 今のビデオの内容について説明した文章です。
 () のことばのうち、一番いいと思うものに○をつけてください。
 (を/が) (が/に) があるときは、どちらかに○をつけて、ことばにも○をつけてください。
 例1：明日、お客さんが (来ます・来ました・来ています) ので、部屋をそうじします。
 例2：天気の良い日は、ここから富士山 (を/が) 見ます/見えます/見られます)。

「ペンゲーの家出」

ここから遠い氷の町に、ペンギンのペンゲーとパパとママが (①住みました/住んでいました/住んでいます)。ある寒い夜、3人は家で晩ごはんを (②食べました/食べていました/食べています)。ママの作ったご飯です。でも、ペンゲーは、野菜が嫌いなので、食べたくありません。パパはママに「これ、おいしいよ」と言いました。そして、ママに自分の魚を一口 (③食べられました/食べさせました/食べさせてあげました)。ママも「これ、どうぞ」と、ペンゲーに野菜を一口 (④食べられよう/食べさせよう/食べさせてあげよう) としました。ペンゲーはママのスプーンを叩いて、食べ物 (⑤を/が・飛ばした/飛んだ/飛ばされた) ので、パパ (⑥が/に・注意しました/注意されました)。ペンゲーは (⑦怒った/怒られた) ので、ずっといす (⑧を/が・揺らして/揺れて/揺らされて) いました。

あ、危ない！ いすが後ろに倒れそうになったので、テーブルクロスを引っ張ると、食べ物 (⑨を/が・落として/落ちて/落とされて) しまいました。お皿も (⑩割って/割れて/割られて) しまいました。パパ (⑪が/に・怒って/怒られて)、ママ (⑫が/に・おしりをたたきました/おしりをたたかれました)。ピン

グーは悲かなしくななって、パパに「抱いっこして」と言いいましたが、(⑬抱いっこしませんでした／抱いっこされませんでした／抱いっこしてくれませんでした)。ドアに向むかって歩あるき始はじめましたが、ママもパパも下したに(⑭落おちた／落おとした／落おとされた)お皿さらやご飯ごはんを片かた付けています。ピングーは家いえを出いましたが、ママもママも(⑮来きません／来きてくれません／来きていません)。「ママとパパのバカ！」

家いえを出いると、外そとはとととも暗くらかったです。ピングーは怒おこって、どんとん遠とくあるいて行いきました。(⑯氷こおりのおみおけを見みて／氷こおりがみおけに見みえて)、怖こわくなりました。家いえに帰かえれななくなって、穴あなの中なかに(⑰入はいりました／入はいっていました／入はいっています)。ピングーは一人ひとりで(⑱泣なきました／泣ないていました／泣ないています)。

家いえでは新しん聞ぶんを(⑲読よんだ／読よんでいた／読よんでいる)ママが時と計けいを見みました。ももう遅おそい時間じかんです。まだピングーは(⑳帰かえりません／帰かえってきません／帰かえっていません)。心配しんぱいにななって、探さがしに行いきました。「ピングー！！」と、ママは大おほき声こゑで(㉑呼よびました／呼よんでいました／呼よんでくれました)。ピングーは、ママのこゑ声こゑ(㉒を／が・聞きいて／聞きこえて／聞きかれて)、嬉うれしくなりました。「ママ！」。ママが(㉓来きて／来きてくれて)、(㉔抱だきあげました／抱だきあげてくれました)。パパが車くるまで迎むかえに(㉕来きて／来きてくれて)、ピングーに毛布もうふを(㉖かけました／かけてくれました)。3人は車くるまで家いえに帰かえりました。

ピングーの体からだはとととも(㉗冷ひえて／冷ひやして／冷ひやされて)いました。ママがスすーうプぷを(㉘温あたためました／温あたためていました／温あたためてくれました)。そして、ピングー(㉙は／に・飲いっしょみました／飲いっしょまされました／飲いっしょませてくれました)。ピングーはママとパパと一緒いっしょにベべッドどで(㉚寝ねました／寝ねていました／寝ねています)。